

『ありがとう、鎌倉の魚たち』 新井梨桜

広島から神奈川に引っ越してきた時、鎌倉の魚の美味しさに感嘆の声を漏らしたことがある。

鎌倉で私は、初めて地引網を体験した。たくさんの人たちと一緒に網を引っ張り上げるのが祭りみたいで楽しくて、しかもその網の中にたくさんの魚が入っていてビックリした。中には網を引っ張り上げた後も生きの良い魚が飛び跳ねていて、その光景は印象的だった。

網の中には様々な種類の魚がたくさん入っていたけれど、中でも透き通ってて銀色に光る無数のしらすは私の頭や体に貼り付いたりして、小さくても一匹一匹が元気よく飛び跳ねている。それらが大勢集まって、まるで噴水が起きているようにも見えた。しらすの威勢の良さから「一寸の虫にも五分の魂」ということわざを目の前で垣間見た経験だった。

鎌倉にはしらす専門の店や直売所がたくさ

んあり、広島育ちで見たことが無かった私は新鮮な気持ちになって胸を躍らせた。

中でも私の気に入った料理は、卵黄と柚子胡椒をのせてだし醤油で食べる釜揚げしらす丼だ。しらすがふわつとしていて、良い塩加減、ごはんとの絶妙な組み合わせに、頬が落ちそうになった。初めて食べた時、こんな食べ方があるなんて、今まで知らなくて興奮が隠せなかったほどだ。今までよりもっとしらすが好きになった。しらす一匹一匹の元気が少しずつ自分の体に宿っていく気がして、海の幸に心から感謝を伝えたい気持ちでいっぱいになった感動を思い出す。

鎌倉は私の大好きな場所となり、実際に行く機会があったことは幸運だった。

今も口があのにしらすの味を覚えていて、もう一度鎌倉のしらすを食べたい。と神奈川を離れた現在もふと思うことがある。

『エボダイの開きへ』 小林晶子

二年前の夏、小泉八雲の足跡をたどって円覚寺へ行きました。

私は八雲ゆかりの焼津生まれで、焼津育ちです。魚が大好きで、マグロをよく食べます。母の育った神奈川県へ行く時はいつもアジの開きを食べています。

母はいつも、

「この辺はエボダイの開きがない。」

と、焼津で言っていて、食べたい食べたいと言っています。焼津になぜか、ないのです。

エボダイの開きへ

二年前の夏、十一才だった私は大船の商店街でどれほどあなたを探したでしょう。

何十年も地元だった大船商店街を歩きながら祖母はなつかしそうにしていました。

鎌倉の大船で、どれほど魚屋さんに行き、祖母はエボダイの開きを買って食べたことでしょうか。

小泉八雲の足跡が大事な私も大船の商店街で探したのですが、その日、売っていなかったのです。夏だったからだと思います。

私は、鎌倉へまた八雲の足跡をたどる旅へ連れて行ってもらう約束を母や祖母とし、アジの開きがおいしかったから今度はエボダイの開きを食べるつもりでした。

それがこのコロナ。

鎌倉へ行って、大船商店街を歩き、魚屋さんの店先でいろいろなお魚を見て、買って、食べることが出来なくなりました。

焼津と鎌倉が遠くなりました。

アジの開きは神奈川県へ行った時、必ず食べていました。

祖母に小さな頃に買ってもらった鎌倉彫の手鏡を使う時、エボダイの開きを食べておけば良かったとも思います。

私にとっては、まぼろしの干物、エボダイの開き。コロナが収束したら、あなたに会いに行きたいです。会えるのが楽しみです。

『きのことの戦い』 楳内泰葉

私には、幼い頃からずっと苦手な食べ物がある。それはきのこだ。きのこといえば、スーパー的な柄に、まるつとした傘という可愛らしいビジュアルが特徴的である。日本でも幅広い種類の料理に使用される食材であり、きのこ特有の食欲をそそる香りも、とても人気だ。そんな良い所づくめのきのこであるが、なぜか私は物心ついた時から苦手だったのである。

幼稚園の頃、周りにはきのこが私と同様苦手な友達は結構いたが、きのこが苦手という大人は見たことがないことに気付き、大きくなれば自然と食べられるようになると思っていた。しかし、小学生になっても、きのこへの苦手意識は消えなかった。

ある時は、なぜきのこが嫌いなのか問われると、

「鍋にしいたけが入っていると、傘にバツ印

があるから嫌だ。」

と、いった謎のネタを披露して笑われることもあった。

きのこが食べられないことで不便な思いはしなかったものの、家族で私以外全員きのこが好きだったので、私の影響できのこ料理をあまり思う存分食べられず、少し迷惑をかけていたので、申し訳ないなといった気持ちはあった。

そんなある日、私に転機が訪れた。何故そんな行動に出たかは覚えていないが、夕飯のお味噌汁に入っていたしめじを完食できたのだ。長年避けてきたお味噌汁のしめじを克服できたことに、自分でも感動した。その上、しめじは美味しかった。この出来事をきっかけに、しめじ以外のきのこも食べられるのではないかと思った。長期戦になるとは思うが、野菜の中で唯一苦手なきのこと克服して、家族できのこ料理を食べられるように頑張りたいと思う。

『「当たり前」って……』 高尾千尋

私は、魚が大好きです。鎌倉の海でとれた新鮮な魚が食卓にある。それだけで少し嬉しい気持ちになります。いつも当たり前のように食卓に並べられる魚たち。でも、それって本当に「当たり前」なのでしょうか。

中学二年生の最後、私は校外学習でクラスの間たちと一緒に新江ノ島水族館に行ってきました。幼い頃にたくさん連れていってもらった記憶があり、とても懐かしかったです。そこで泳いでいた魚たちは、皆いきいきしていて、輝いているように見えました。それを見て、幼い頃にはこんなこと思わなかったけれど、「美しいな」と感じました。

私たちがいつも食べている魚も、こうやって人間と同じようにいきいきとして、一生懸命生きていたのだということに気付きました。そのような生き物を食べるということは、当たり前ではないと思います。

「当たり前」とは、「そうあって当然なこと」という意味です。では、「当たり前」の対義語を知っていますか。それは「有り難い」です。

「有り難い」とは、読んで字の如く、「有ることが難しい」という意味です。現代語では感謝の意味を表す言葉として日常的に使われています。

私たち人間は、当たり前のようで当たり前ではない「有り難いこと」によって、毎日生かされているのです。つまり、今生きていること自体がとても有り難いことなのです。だから、私たちが、生きるために命を恵んでくれる魚たちにも感謝しなければなりません。

また、それと同時に、魚たちに恩返しをするために、魚たちがすむ海をきれいに保つことが必要だと思います。

魚さんたちへ

いつも本当に有難うございます。

『あのと看見た笑顔』 浅川花和

私は野菜がきらいだ。そもそも食へること、そのものに興味がない。ずっとそう思っていた。そんな私の気持ちをかえてくれたのは、小学校三年生の時、母と作った一つの料理だった。

小学三年生の時、私は学校の校外学習で鎌倉の野菜市場に行った。市場のおじさんやおばさんがあたたかく迎え入れてくださる中、私は端の方に立ち止まっていた。野菜が嫌いな私にとって、そこは地獄のような場所だったからだ。なぜ市場の方々はあるな笑顔でいることができるのだろう。不思議な感情を抱いた。私は自分のなすべき仕事を早く済ませるため、すぐそこにあつたカブだけ買った。

家に帰り、黙ってそれを母に渡すと、なぜか母は笑顔でうれしそうにしていた。そして、「一緒にお料理しよう。」

と言うが早いか、台所で準備を始めてしまっ

た。もちろん乗り気でなかった私は、言われるがまま手を動かした。でも内心、何ができるのか、ふわふわと香ってくるにおいに、少しばかりワクワクしていたのを覚えている。

あつという間に料理は完成、おみそ汁ができていた。初めて自分で作った料理は、とてもおいしそうに見えた。少しの不安を抱えながらカブを口に入れる。

「おいしい。」

野菜を初めておいしいと思った。嬉しかった。その時私は今日みた笑顔の意味を知った。食べることに、それから料理に興味を持った。

私は野菜が好きだ。料理が好きだ。今では色々な料理を作れるようになった。食べてくれる人のことを想像しながら作っている時間が楽しくて、幸せでたまらない。

感謝している。食べることに、野菜に、料理への素晴らしさを教えてくれた母に、市場の人に、あのと時のカブに。

心からの感謝を、いま伝えます。